灰色の声

浅岡美月

やりたかったことを左耳から押し流す
午前三時が瞼の裏を乾かして
生乾きの髪が背骨の熱を奪う
暗闇の視線に心拍音が乱れる
硬質な痛みを
ひんやりしたタオルケットで抱えて
喉の熱で呼吸音をおさえつける
重力に裏切られ
あずけたはずの腕が肩に吊られている
鼻からゆるやかに世界を取り込んで
遠い空に触れた言葉が
鼓膜の奥であたたかく絡まる
何も成していないことになってしまう
声のなり損ないが波になって
忘れられずに眠りに落ちる
横隔膜に溜まる感情を
唾液の甘みで正せたことにして
気道に毛布のほこりが貼りつくのも
もう半分くらいで新しくなくなる